

歴史地理の研究に対する地名学の寄与

鏡 味 完 二

地名学は未だうら若い学問であるので、過去において歴史地理学に寄与した功績を語ることは困難である。そこで現在の地名学がある程度の歴史地理学に対して貢献してきたことと並んで、むしろそれ以上に、これから寄与するであろうところの希望とか予測とかいったことについての考察を試みてみよう。そこで地名学がどういう使命と課題をもっているかということについて先ず関説しなければならぬのであるが、それについては己に二書にまとめて「日本地名学」科学篇と地図篇とし、昭和三二―三三年に、京都の日本地名学研究所から発行したものに明らかにしておいたし、またその科学篇は、伊藤隆吉教授によって、地評三一巻・三号・一九五八・一八〇―一八三に紹介されているので、参照あらんことを望む。

個々の地名の語原や起原についての考察は、極めて古い時代から専門の学者をはじめ、素人の好事家に至る非常に多数の人々によって行われて来ている。そこである一つの地名に対して何十通りという異説があるほどに、結論が出し難いまま、現在もこのような研究は盛んである。すなわち甚だ非効率なただたどしさが、過去の日本地名学界の事態であった。これに対して一方、地理学の研究、とくに歴史地理学では、少くとも最近三〇年間には、歴史地理的事実を追求したり証明したりする一つの手段として、地名を利用することが時々行われてきた。しかしこれもそれを概

評してみると、そこに地名の誤用が見出されることが稀でないけれども、上記の語原の研究の不徹底に比べたならば、それはむしろ学門の進歩に貢献しているといえるであろう。

歴史上の有名な事件や人物などの記事は、それが地名に現われてくることは割合稀なことである。すなわちそれは地名が住民の日常生活の中で発展してきたものであるからで、地方史、ことにある地域の開拓や村の発生、生業の営みなどの時間的な記録は、よく地名の中に残されるという結果になる。このような事情の存在は、地名学が歴史研究の好ましい一手段となりうる所以である。ある地域の歴史地理を明確にしたり、ある地域の地名誌を解明する場合の研究資料は、歴史的文献の中には求め難いことが多い。しかるに地名は地名自体の中において、すなわち地名だけからでも、その発達の順序や起源を推定することができるものであり、総合的な地名学の方法を以てすれば、次第に上代から更に先史時代にまで溯って地名が解釈されうるのであって、この点において地名学は方言学や考古学と極めて類似した性格を具えているということができよう。各地方の方言発達についての文書による記録が存在していなくても、方言学はそれ自ら方言の諸問題を合理的に解いて行くし、その成果が反って中央の言語の発達をも明確に決定して行くように、国土の全域に亘って存在する地名が解かれて行つて、言語学或は国語学をはじめ、歴史や歴史地理にも貢献するようなことにもなりうる。任意の地域の歴史が検地帳の類や村の覚書などによって知られるとしても、それは先ず近世における事象についてであり、中世になると遙かにその希望は小さくなり、古代から先史時代に到れば殆んど絶望となるであろう。この場合に方言は時代と共に変化し地域的に移動して上代や先史時代のものとは、非常な相違を来している。それに比して地名は少からぬ分が改名されたり変形されたりはしていても、なお多くの地名にはその語根の中に古い時代の言葉が保持されて今日に伝えられている。

しかしここで吾々は過去の歴史的事象を地名の助けを借りて知ろうとする際には、まず何よりも地名そのものを正しく把握することが不可欠である。上述のようにわが国の地理、とくに歴史地理の研究に地名を利用するに当って、少からぬ重大な誤謬を齎らしたのは、とくに難解で且つ誤解され易い性格をもつ日本の地名に対して、せさ立成を不用意のまま恣意的に利用されたために生じた結果であると思われる。地名が過去の歴史的事象およびそのような事象た地理的環を成立させ境を物語ることを知ることは、地名の名義の解決を求めることである。地名の起源を尋ねるためには、先ず現地に赴いて、つぶさにその立地する地理的環境や、若干の歴史的遺物・考古学上の出土物などの観察をすることは、今まで普通に行われて来たことである。地理学や歴史地理学の野外の研究者には、地理の研究のためのフィールドワークが、同時に地名のそれとも平行し、その場合に両者の結合関係を思いついて、結論を出すということになる場合が多かつたようである。しかしそれだけで十分に確実性をもつことができるならば、地名学との関連においての歴史地理をいまここで説明することを要しないのであるが、このような現地における直接の観察のみでは未だ地名、とくに日本の地名の場合には、必ずしも正確を期し難いものであるほど、わが国の地名は複雑な発達史をもっていることをよく反省しなければならぬ。これについては拙文「地名の現地調査とその成果」（地名学研究誌京都市伏見区桃山長岡越中北町、日本地名学研究所発行・第七号・昭三三）に記述しておいたことで、それを参照されたいと思う。そしてある地名の名義を解く上の最も確実な地名学的方法是、拙文「富士山の地名学的研究」（地評・二八巻・五号・二三七―二四八・昭二九）に示したようなのが、その範例であると思われる。これについてもここに再説をさけ、読者に御高覧を願いたいと思う。

ここで最も重要な事項は地名学における地図学的方法である。筆者はこの方法に従って、日本地名学のアウトライ

ンを描いてみたが（上掲の拙著「日本地名学」）、この方法は今日、地名学の研究の最も進歩し盛んに有益な発表を出しているドイツにおいてさえも、未だそれほど進捗していないが重要な課題とされていることは、クラントマイヤーがその近著の中で明らかにしている（E. Kranzmayr: Ortsnamenbuch von Kärnten I Teil: Die Siedlungsgeschichte Kärntens von der Urzeit bis zur Gegenwart im Spiegel der Namen. 1956）筆者がこの方法に気づいたのは次の地名の拙文「カイトとフナコシの地名学的考察」（地理学・一卷・五、六号）をかけた一九五三年であった。カイト・カイツ・カイチは無論同一語根型の地名であるが、東北地方のカツチや、南奥から九州に分布するコーチ・コチも同型の地名であり、それらの何れも河谷に命名されていることから、それと同じ語根をもつカイト・カイツ・カイチも「河谷」に命ぜられたのが最初であり、現に紀伊半島に多いカイトが山間の河谷に在ることから、平地のカイトも後に平地に適用されたものと推論した。このような同一語根の地名型のうちの、幾つかの変化語形をとる地名群の分布は、その配列が発達の順序や、時にはそれらの地名群の成立の時代を把握する上に強い示唆を与えることが期待される。カイト語根地名型の発達については、尚筆者は結論にまでは至っていないが、将来の一課題として提起したまでであった。

地名研究の地図学的方法のもう一つの研究成果について次に記してみよう。とくに明瞭な主要分布形態は、一つの地名型の周囲分布をとる場合に現れるものである。この種の分布は非常に多くの例があり、日本の文化の中心地、多くは各時代の首都のあった地域を中心として発達しているし、同一の時代においても、その前期・中期・後期において、漸次変化する大きさの分布地域をもって、吾々にその発達の歴史を示してくれる。これについても拙著「日本地名学」科学篇・一〇〇—一二五頁に、「地名の層序と編年」の章として詳述したことである。このような地名の編年史

が完成すれば、日本の歴史が地域的に解明され、開墾や集落の発生発達の経過が系統的に明らかにされることとなるであろう。このように重要なしかも大きな問題は、今後引つづいて各種の科学部門の角度から照合して、一層確かめられて行かねばならぬことで、決してこの方法で決定された結果が、一挙にして不動の確論に到達したものとは考えていない。たとえいくつかの誤りを冒しているとしても、やがてはこの方法は今後益々適用されて、いよいよその有益な能力を現すべき時期が来るものと考えられる。

地名学における地図学的方法の今一つの研究成果が、歴史地理学に示唆を与えるであろうことを記してみよう。拙文「日本の地名分布における二三の傾向、重心・空洞・対立」(地名学研究、一〇・一一号、昭三四、七一九)において、近畿の文化地域の以前に東部中国に文化地域が存在していたことを結論として述べた。二七〇種の地名型の分布から帰納された結果からみる限り、出雲や北九州などには地名発達史上の大中心勢力というものを明確に見出し得ないということになった。たとえそれらの地域に近畿文化(大和・京都の上代から中世の文化をさす)以前の文化中心があったにしても、地名の発達の上からみると、更に東部中国、すなわち吉備地方の方がそれら以上の文化地域としての勢力をもっていたということになる。

科学としての日本の地名学もまだ出発したばかりの靚があり、夥だしい日本の難解な地名の名義と、その時間的空間的意味が明らかにされ、地名発達の規則が編み出された、明確にして整然とした地名学の建設が望ましいのである。他方、それらの成果が確実な基礎資料として、日本の歴史地理・言語学などに貢献することを切望するものである。他方そのような時期を待つまでもなく、吾々地理学徒は任意の地名を解くにあたって、単に言語学や文献だけからの比較研究(無論これらも実は甚だ重要なものであるが)という狭い視野からでなく、少くともある地名型の全国的分布

に出発して、地名学的方法を以て漸次問題の解決に向うならば、合理的な成果を得ることができ、それを以て上代の或は先史時代の命名当時の地理的事情なり、村の成立及び發達に対して一縷の光明を見出すであろう。有能な才を抱き乍ら最近他界した耕崎正男氏が、かつて三沢勝衛氏に向けて「信州に塩のつく地名の多いわけ」を質問したとき、「日本中の塩の地名を調べてみたか」との叱言的返答があったというが、それはここで反省すべき警句のように思われる。ある地名を自らの地理または歴史地理の研究に利用した者のうち、果して何人がその地名の全国的な事情をも古代からの文献に現われた地名の変遷と併せて精査した上で適用したであろうか。不幸にしてこれまでの研究は語魯の上でのアナロジから、自己の研究を弁護する具に用いられた程度の不徹底な研究例が少くなかったのである。

地名の研究成果を歴史地理の研究に利用する際に、ここになお注意すべきことがある。それは端的に言えば、ある地名の語原と起原とを峻別して考えることである。一つの地名の語原というのは、その地名の示す言語内容が何語に創っているかということ、それに対して起原という場合には、その地名の命名されたときの意味であるとして、筆者はこの両語を区別して用いようと思う。例えば鎌倉という地名は、或はそれを語原的に考えて、朝鮮語 *K'ihun* (大意)・*Kor* (部落)であったと仮定しても、それだからといってこの集落を朝鮮人の創建に由るとすることは、直ちには出来難いことであろう。それはたとえ初めそのような意味の言語が用いられていたとしても、この地名の発生した頃にはもう、そのような意味としては通用せず、或は現代の方言から解して、カマ(河谷の深く窪んだ所)クラ(岩石)であったかも知れない。この何れもが正しいとしても、歴史地理的には、或は景観史的には、後者が一層重要であることは明らかである。吾々は地名の起原を尋ねることによって、その地名の指示する意味を介して、命名当時の景観なり歴史なりを知ること、或はそのように命名された集落の創設当時のそれらの事情を知ることができ

からである。これに反して地名の語原的探求のみによって得られた結果を利用することに止まれば、理論的にも實際上にも、そこに大きい矛盾と混乱とを来すことになるであろう。という理由は比較言語学的に追求して行けば、現代の国語も方言も地名も、その殆んど凡ての名詞はアイヌ語・朝鮮語・蒙古語・支那語・マライ語・サンスクリット語などのうちの、いくつかの言語に共通の連なりをもっていることになるのが普通であることにある。そこで吾々は植民または集落の歴史的顧慮なくしては、断じて民族的分布の事実を、単に地名のアイヌ語か朝鮮語かという語原的結果だけからは確定できないことを深く考えねばならない。

また個々の地名の起原を確めて行くという方法は結局、地名の現状の傾向から推論する方法であるから、確実なものを書えながら、その上に立論がなされるといふ長所をもっている。これに対してある地名の発音上の狭い見地から出発しようとする語原的研究の結果のみから、歴史地理の研究を展開して行こうとする場合には、そこに無理が生ずる確率が大きくなる理である。

地名と一概にいわれる中には、地点の地名からはじまって、大は一國、一大陸の名にまで及んでいる。それらの中では最も小さい集落の名とか、その内側に存在する小地域、小地点名とかいうものが、実は歴史地理の解明にとつては一層有用なものである。それよりも大きい地名から、その地名を負う土地の歴史、又は歴史景観を知ろうとする場合には、その土地の多くの地名を精査して、それらの中からその地名の元となった、筆者のいわゆる胚種地名を探し出すことによって、その土地なり村なり町なりの、歴史や景観の起原に溯つての知識を把握することができるであろう。このことについては拙著「日本地名学、科学篇」四一—四四頁に説述したが、ポルフもその論文(S. A. Wolf:

Einiges zur Historischen Auswertung der Ortsnamen-forschung, Bzn. 2 (1957), 182-189) の中で、次のよ

うな例をひいて述べている。東ドイツには *Salzwedel* という町がある。この名前の *-wedel* とは、スラブ語で *Furt* (浅瀬) の意である。すなわちその川の浅瀬の場所に、己に早くスラブ人による古代植民の中心がおかれ居住されていた。そしてそのスラブ語の言葉は忘れられてしまったが、実はこの町の南方九軒のところに *Altensalzwedel* という地名が残っている (この古ザルツペーデルが、すなわち胚種地名である……筆者の挿入文) とところがこのザルツペーデルの地名の文献上の初見は一、一二年で、すでにこの時にはこの町はその地方の主邑となっていた。このように文書の上では、これ以上には探求できないものが、地名の助けを借りることによって、殊に胚種地名の発見によって、そしてそれが言語学的にスラブ的のものであることの解明によって、一層遠い過去の人類居住の歴史と、その頃の集落が *Furt* に位置することから、古代植民の中心市場であったことまで推定されるのである。

同氏は尚、文書に現われてくる地名を統計的に処理して、即ち文献上に出現する *-dattel* という地名の頻度をとって、その集落の時代を決定しようとした *L. Friesel* の方法を、誤った統計的方法と評している。フィーゼルはこのような頻度をとって、九世紀は一、一〇世紀に三、一一世紀に一八、一二世紀に一九、一三世紀に二三という数値を出して、これによってその集落の年代を割出そうとした。これは純粹に歴史地理学の課題ではないが、歴史地理の研究上集落の創設の時代を推定することはまた重要なことであるから、ここに言及したのである。この場合先ずその文献に伝えている所のその内容が、果して合理的であるかどうかということが問題である。即ち文書の誤記ということの外にも、公私間の記録上の相違をどうして判定してゆくかということが問題である。後者の場合は、長いあいだに亘って個人所有がつづいて来て、最近になってはじめて公文書に載せられるということが起りうるからであると説いている。それに対してフィッシャー (*R. Fischer*) は、これらの点がよく吟味されて、その上で研究資料としてその統

計を用いる場合には、次のような考慮を払うべきことを説いている(R. Fisher: Ortsnamen der Kreise Arnstadt und Immenau, Leipzig, (1956)。ある村の創設についての文献上の初見というものは、普通一〇〇年位以前にもう既にその集落は成立しているものであること、それ故に集落の発生年代を無条件に決定すべきではなく、ただ命名の順序に一定の結論を与えることは差支えないとしている。これは確かに勝れた方法上の一つの智慧である。

次に歴史地理の研究上興味があり且つ有益なことは、荒廢地名に着眼してそれを自らの研究に活用することである。荒廢地名とは現存しない地名で、住民の記憶や古文書の中にのみ残っているもの、及び現に住民には一般に用いられないで、地籍名(Flur-Name)としてのみ余命を保っているものなどという。ドイツの地名学界では、これは *Wüstung* と称せられている。荒廢地名の発生の原因には種々のものがある。鉱業の不振から多くの集落が放棄されることはその例に乏しくないが、更にその他の資源の頽廢、水の欠乏、戦争による破壊、天災や流行病による死滅或は人口移動などが挙げられる。荒廢地名を発見するには、(一)文献によって、また(二)地籍地名によってする方法がとられる。日本の場合でいえば、吾々が郷土調査をする際に、某々屋敷とか、某々垣内という地籍名を畑地や山林の中に見出すことによって、そこがある時代の集落址であったことや、宮ノ前とか、寺内・堂ノ下(もっともこういう地名はそれに対して、別の意味に対する宛字が行われている場合のあることに充分警戒しなければならぬ。拙著「日本地名学」科学篇、四三頁参照)などという荒廢地名を手懸りとして、そこに社寺の存在したことを知るのである。またそれらの過去のものと、現在する集落や社寺との歴史的調査から、ある時代におけるそれらの移動と、またその原因とを明らかにすることもできるであろう。

最後に筆者が今まで諸誌に発表した地名学の文献を紹介したものの題名を次に記してみよう。これらの論著は地理

学歴史地理学にとり格別関連する所の大きいと思われるもので、それを日本の地名の場合と比較して説明するように努力しておいたものである。

- (一) ニーマイヤー、ミユンスタールランドの地名、地名研究の文化地理学的方法、地評、二九卷二号、一〇三—一〇六。
 - (二) ラウテンザツハ、イスパニアとポルトガルのアラビア起原の地名、地評、三〇卷、一号、六五—六八。
 - (三) ハーリツヒ、南部ツェントラル・マツシーフの遺跡と地名、地評、三〇卷三号、二三八—二四一。
 - (四) (諸家のもの)、日本及び欧米の地名研究の現状、地名学研究、創卷号、二—二。
 - (五) スミス、英国の地名の要素、地評、三〇卷、四号、三一六—三一九。
 - (六) オーバーベック、ドイツの地名と方言、地名学研究、五号、三七—四七。
 - (七) ヤンクーン、集落考古学的方法と問題、地名学研究、六号、一一—二〇。
 - (八) ランゲンベック、地名分布の空洞と伝播の諸型式、地名学研究、七号、一一—七。
 - (九) ジョーンズ、インイアン地名と擬インディアン地名、地名学研究、九号、一一—一〇。
 - (一〇) デイトマイヤー、ベルギツシエスラントの地名と集落史、地評、三三卷七号、三八五—三八六。
- 以上の文献の中に見出される著るしい研究上の目標としては、
- A 集落発達史、集落(即ちその地名)の層序と編年
 - B 開拓史(植民史)
 - C 先史地理、歴史地理
 - D 文化景観史
- などが数え上げられる。しかしこれらの項目は凡て相互に強い関連のあることで、それぞれの論著によって、その重点の置き方に相違があるという程度の差であるにすぎない。